〈研究論文2〉

異文化における理解の問題

高木きよ子

はじめに

国際間の交流は近年ますます盛んになってきているが、日本のように単一民族・単一言語・単一文化の国では、国際交流はすなわち他の文化、異なる言語をもつ他民族の異質の文化との交流を意味する。政治・経済・外交・教育・宗教・文学・芸術等々文化のあらゆる分野にわたって行なわれるさまざまの活動を通して大切なことは相互の理解ということである。相互の理解が成立った上に国際交流はその目的が達成される。しかし実際にそれは果たしてどこまで可能なのであろうか。もとより異なる文化間の相互理解はまったく不可能であるというのではない。しかし理解しえたと考えていることが、実際にはかなり相互の認識にズレがあったり、あるいは気付かないままったく裏腹の認識をしている場合も相当あるのではないか。そのような場合、相互の理解を妨げているものは何かということが一つの問題として浮び上ってくる。これは、どこまでも当事者が気づかないままにおこなった言動の結果をさすのであって、当初からわかり合えないことが明瞭な点について問題にしようとするのではない。この気づかないままにおこった理解のズレについてその原因をたずねてみようと思う。

筆者は長年にわたり国際交流の一端につながる仕事に従事してきている。具体的に云えば外国人（主としてアメリカ人）に対する日本語教育であるが、その経験を通して常に感じられることは、ごく些細なことにも、言語のちがい、文化の相違をつくづく感ぜさせられることが如何に多いか、ということである。ごく些細な日常的現象に異文化間の理解のズレがあるということは、根本的な国際間の問題にはより大きな理解のズレ、あるいは誤解がおこ

りうることを示唆している。したがってこれは小さな事象としてみのがしておくべきことではないと思う。そこで、このようなズレについて、それがどんな場合にどうしておこるかについて考えてみたいと思う。この小論は私が経験を通してとらえた異文化間の理解のズレについての報告にすぎない。

言語の役割り

異なる文化の間でおこる理解のズレには、いくつかの要素が考えられる。その中で中心的な位置をしめるものをとり出してみると、言語・思考形式・行動や習慣という三点があげられる。この三つはそれぞれがまた関連性をもって居り、相互に重なり合っているものもあるが、その関連性の上で、例えばある場合には言語そのものが、またある時には考え方の相違が、そして更に行動や習慣のちがいによる文化全般の異質性が、相互理解のズレのもととなっているのである。このうち、まず言語による問題についてとりあげてみるが、ここでは、異なる二つの言語を、日本語と英語に限ってみてゆくことにする。

言語を構成している諸要素のうち、その中心となるのは音韻・語彙・文法の三つである。[1] 言語が人間社会の中で果たしている役割りは思想や感情を伝達するという重要な手段としてのそれであるが、伝達に際して、必要欠くべからざるものは音声あるいは文字である。この二者によって意味が伝えられる。文法はその意味を伝えるための規則である。言語が異なれば、音韻・意味・文法も異なってくるので、そこに異なる言語間の理解の問題が当然おこってくる。それについて身近な例を引きながら述べてゆくことにするが、この論の中では音韻に関するものと文字に関するものについては省略する。音声や文字は別の領域を形づくるものだからである。

語彙の違いによる理解のズレは、二つの言語のあらわす意味内容がまったく同じものではないということからおこるものである。例えば英語の rice は米であると同時に、米を炊いたものつまり日本語のご飯という意味ももっている。しかし日本語に不慣れな外国人がそれに気付かず米屋に電話をかけて「ご飯を10キロ届けて下さい」と日本語でいったため、rice に米とご飯の両様の意味があることをまったく知らなかった米屋が仰天したという笑い話があるが、これなどは、二人の間に同じと考えられる言語が使われ乍らその言語の意味の違いからおこった例で、このようなものは他にも限りなくある。より高級なというか抽象的な言語の例としては、これまで多くの識者によって指摘されているが、日本語の神と英語の god、罪と sin、責任と responsibility のように、ある点では同じ意味内容を指し示し乍ら、しかしその語彙にはかなり異なる部分もあるために、それをあらかじめ確めないで話しがなされた場合には、明らかに、そこに提起される問題に比較のズレがおこるのである。これらは意味の違いからおこる理解のズレであると同時に、のちに述べるような言語を支える文化の問題

にも大いに関わりのある問題でもある。

語彙の問題で今一つ誤解のおこり易いのは外来語である。日本には外来語が多く、カタカナ書きされる西欧語は、日本人にとっては母国語よりもよりセンス（これも外来語）がいいかのように受取られ、巷に外来語が氾濫している。しかし、外来語は日本に限った現象だけではなく、フランスでは、「フラングレー」と呼ばれるフランス語化した英語の禁止を政府が行なったし、お隣り韓国でも大統領命令で国語浄化の問題が閣議で出されたと報じられた。[2] それぞれ国民性を示すものであるが、日本の場合氾濫する外来語に対して政府の手は打たれていない。そして外来語はもはや日本語の一部として、だんだんその根が深くなってきつつある。この現象は国語問題からいえば、由々しきことであるが、私がここでふれたいのは、その大局的な由々しさよりも、外来語のもつ意味が、もとの言葉の意味から離れたことによっておこる理解のズレについての「由々しさ」である。外来語が、言葉として日本語の中にその地位をしめ定着した際に、どのようにしてそのもとの意味を失なったかという問題についてはあまりとりあげられていないようであるが、和製英語が、もとの意味をかえてしまっていることはたしかである。この和製英語が実は理解のズレの元凶である。例えば、会話をしている者同志が一人は母国語の英語の意味で理解し、他は外来語としての英語の意味で理解して、相互に話が通じ合ってしまう場合もある。この場合双方ともそれでいいと信じているところに問題があるのであり、もし双方、あるいはどちらか一方が「何だかおかしい」と思ってそこを正してゆけば問題は解決する。ベースアップとかOLのように明らかに和製英語とわかる語についてはそれほど深刻な問題はおこらないが、日本人が英語とすでに信じ込んでいる外来語が、実はそんな英語はどこにもないという時には、チェック[3]の方法もかなり困難で、相互理解を妨げる壁になるのである。

理解のズレをおこす語彙上の問題は飜訳あるいは通訳の際にもおこる。これはある言葉の意味するものが、別の言葉ではどうしてもおきかえられない場合におこる問題である。外来語についてもこのことはあてはまるが、例えば日本文化の中にないものについての言葉はもとの言語をつかう場合が多い。それに近い言語をさがすのは困難であったり、新らしく造語すると何となくぎこちないので、原語そのままを使ったり、発音を日本調にしたり、また著しく省略してそこに新しい外来語ができ上る。明治以来の西洋文化尊重で外来語はどんどん受容され日本語にとってかわってゆくが、単語ではなく、より広い範囲、領域をあらわす言葉や文の飜訳は、かなり慎重を期さねばならず、厄介なしかし大切な問題を提起する。名訳といわれるものはこの困難さを見事に克服したものであり、逆に迷訳は、この問題を軽視したものの謂である。学術論文の場合は、かなりこの幅は縮められようが、微妙なニュアンスを必要とする外交文書や、特殊な文化的背景をもつ小説等

の飜訳の場合には語彙のズレには常に注意を傾けねばならない。例をあげればきりがないが、日本語から英語への飜訳にも、またその逆の場合にも常につきまとう日英両語の「はざま」[4]をどうもがきあがいて克服するかに飜訳の技術はかかって居り、例えば、ある日本の小説に松があったと書いてある場合、松が単数なのか複数なのかを直ちに問題としなければ英語の文はなりたたない。これはいたって簡単な例であるが、いろいろな点で詳細な検討を必要とし、飜訳にはかなりの経験と技術が要請されることになる。

飜訳の問題は単に言葉そのものだけでなく構文、文法の問題を含んでいるが、この構文という観点からみても日本語と英語には相違がある場合が多い。その相違はある場合には飜訳調というものを生み出している。つまり文における品詞の順が異なったり、品詞の使い方が異なることからおこるものである。これもその背景にある文化にかかわってくるのであるが、英語文では比較的よく使う表現が日本語ではあまり使われないかわり、別の表現が使われていることなどによるものであろう。また、日本語独特の言いまわしがあって、それは文法をこえたところにあるものである。外国人の日本語が文法的にはたしかに正しいのに、日本人には不自然にきこえることがしばしばある。そういう場合日本人なら別の言い方をしているのである。母国語として日本人は日本語を言語のきまりを心得ていて使うが、習得した外国語としての日本語ではそのきまりがなかなか摑みにくい。言語学の分野では夙にチョムスキイによって提唱された生成文法によってこの点が探究されて久しく、いわゆる「コンピテンス」、「パフォーマンス」として区別されている。[5]つまり「文法性」と「許容可能性」の区別である。そしてこの許容可能なものの他に、さらに「適切さ」という要素があるという提唱もなされている。[6]つまり言語であらわされる文には、文法だけでは説明しきれないものがあり、それが問題となるのである。そして現実には自然さ・適切さのある文が語られ、文法の規則通りに組立てられた文は生きた日本語にはならない。国際線の機内アナウンスで英語がどのような日本語になるかを注意してきくのは退屈しのぎになるだけでなく異なる言語のもつ現実の問題にふれることができて興味深い。

母国語でない言語を学ぶ場合の難しさは、種々の局面からとらえられるが、外国人が日本語を学ぶことを例として考えてみると、この難しさは絶対的のものではない。もとより英語等を母国語とする外国人にとって日本語の文字、特に漢字の複雑さ、音韻——発音やアクセント等——は習得するのにかなりの困難を伴うことは事実である。しかし文法体系はそれ程問題ではなく、そのしくみさえ論理的に把握すれば、あとはどれだけ時間をかけるかという時間の問題である。日本語は非論理的であるというのは、外側から見た観察であって、内側から分析すればそれなりの論理はあるのである。[7]その枠組さえしっかり習得すれば、文法そのものは、日本語だからむずかしいというものではない。これも屢とり上げ

られることであるが、助詞「は」と「が」の区別についても、言語学的には説明されつくしているが、一方、どんな説明もこれを簡潔明瞭に表わすことはできないように思われる。その言いつくすことのできない部分を担うのは言葉そのものとか文法体系ではなく、むしろ言葉の背後にあってこれを支えている文化の特質なのである。文化の違いからおこる思考形式、生活態度・慣習・行動の型のちがいが大きな役割りを果しているといえる。そこで次にその点について少しくふれてゆくことにする。

異なる思考形式

異なる文化における思考形式の違いは二つの面をもっている。その一つはいわゆる発想法の違いであり、他は価値観の違いである。この双方は互いに関連し合って不即不離の関係にあるから、何れか一方のみを論じて足りるものではない。

発想法の違いは異なる文化の間に顕著にあらわれる。その基本になるのは思想の論理構造である。外国人と日本人の間には必ず発想法の違いという溝があって、相当日本文化に精通した外国人でもやはり一〇〇%これを理解しているとは限らない。たとえ理解しているにしても納得しているかどうかはわからない。人間は自国の文化によって行動も思想も制約されるから納得できない方が自然である。そこで日本人の発想法についてみてみると、それには、いくつかの特質を考えることができる。

まず第一に、日本語には曖昧さという特質がある。日本語で書かれた文章は、英語のそれに比べると曖昧で、著者が一体何を言おうとしているか明瞭でないという批判が外国人によってなされることが多い。この場合あきらかに発想法のちがいがあるのであり、日本文化の長い伝統の中では、言いたいことははっきりいわないのが美徳であるという価値観に左右されている。したがって日本語の表現には「…というわけです」という文末、「…といえるんじゃないかと思います」とか「…というふうに考えられないこともない」などという表現形式は、日本人の独自性による表現であり、よほどのことでない限り「私はこう考える」とか「〇〇である」という直接的な表現はさけるのが通例である。しかしこのような婉曲的な表現は、直接的表現を通例とする外国人にとっては、曖昧かつ無責任であるということになる。そしてこのような日本文のもつ微妙なニュアンスは理解されない場合が多い。

日本語の文における主語の省略もこの種のものの一つであり、「私はこう思う」あるいは「私は昨日芝居にいった」というような場合には一般に「私」を使うことはない。文に内在する世界では「私」は省略されていないが、それが表現されるとき「私」は脱落して主語省略の体裁をとる。この主語の省略について日本は西洋にくらべると個の確立がないから個人を主張する表現も好まれないし、人称代名詞も必要でないという見方もある。たしかに筆者の経験を通してみても、主語の省略が外国人にとっては、そ

の習慣にないことなので理解に苦しむことであるように見えるが、日本文の中にやたらに「私」「あなた」を入れた外国人の話し方は日本人の耳には非常にうるさく響くものなのである。

以上見てきたような極めて日本人的な心情・生き方・態度をあらわす表現法は、日本人なら誰にでも理解できるが、日本文化の圏外にいる人々にとっては不可解であると同時にマイナスの価値をもつものになる。日本人の耳には美しくひびく虫の音も欧米人には雑音としかきこえないというのもこれをあらわしている。外国人志向の日本人の親切が相手にはおせっかいとかぶしつけにうつるのも生き方の根本的差異に根ざしているからである。人間であるから喜怒哀楽の感情をもつのはどの国でも同じであるが、その表現のしかたのちがいが、行動となってあらわれた時、文化のちがいとして、理解をはばむものになるのである。最近の毎日新聞に出ていた、オランダ人の死に対する考え方など日本人としては考えさせられるものが多い。(8)

死の問題についていえば、日本人と欧米人との間にはその考え方に大きな開きがある。死は個人の生命の終焉であるとして対処する外国人と、死はなお生とのつながりがあると考えて死者の供養をつづける日本人の考え方の間にはかなりの隔たりがある。死を生の中へ包みこんで死後の世界との交通を肯定する日本文化は、仏教思想を根底として居り、(9)生と死の対決を基底にするキリスト教文化とは異なる。日本の習俗として現在なお見落すことのできない墓参は、祖先崇拝の一つの行動の型として行なわれるが、その習俗をもたぬ外国人はこれを奇異の眼で見るのである。日本人にとって死は人生の終りであると同時に次の世への出発である。日本人の宗教意識はこれを「あの世への旅立ち」としてとらえる。墓石に記されている文字はこの宗教意識をあらわすものではないかと思う。日本人の墓石には歿年とその時の年齢が記されている。それに対して西洋の墓では名前の下にその人の生年と歿年が刻まれているのが通例のようである。例えば William James 1842～1910のごとくである。これはその個人の生きたことをはっきりと示し、死によってその個人が終わったことをあらわしている。日本式の歿年を記すやり方は、その年に死んだということをあらわす一方、墓地においてはその年からの出発ということが思考の底にあるように思える。もっとも墓石の記し方の規則とか習慣について詳しく研究したわけではないので、それ以外の要素が入っていることも考えられるのであるが。

このような思考方式・価値経験のちがいは、生活態度・行動・情緒的反応の中にさまざまな形で生きていて、それが、それぞれの文化をつくり出してゆく。他の例についてみれば日本における順序の重要視などもこれではないかと思う。もともとは中国思想の影響が強いと思われるが、儒教の徳目である長幼の序は年功序列制度を生み敬語をつくり出した。この順序は、単に人間関係にのみみられるものでなく社会の諸現象にも広くゆきわたっているし、

自然界における四季の変化についてもその表現には順序があり、一年の動きはその順序によって正しく行なわれ乱されることはない。それが言語の上にも反映している。同じ温度であっても春は暖かく秋は涼しいと表現する。もちろん英語でも同じことはあるのだろうが、日本ではもっとそこに厳密さがあるように思える。漢詩文における起承転結はそのまま社会現象の諸般にわたってみられるものであり、これを乱すことは秩序をやぶることにすらなりかねない。舞楽から能楽へと展開した序破急も音楽だけでなく、他のさまざまな生活活動の中に入りこんでいる。話しのすすめ方、手紙の書き方等にも及んでいる。申すまでもなく西洋にそれがないというのではなく、そういう順序等について関心のもち方が異なると思うのである。そこに日本人の価値観があり、それが思考・行動・態度の中に反映されるので、それと異なる世界観をもつ外国人との間に意志の疎通を欠き齟齬が生じるのである。

敬語の問題にもちょっと触れておきたいが、敬語は日本人にも場合によってはかなり難しいものである。それは敬語というものの構造が単に言語だけに限られているのでなく、これを越えたところまでひろがっているからである。目上・目下間の言葉なら日本人だけでなく外国人にもあてはまるはずであるが、例えば英語には、日本語のような敬語はあまりないようである。敬意をあらわす表現はもちろんどの言語にもあると思うが、日本語におけるほど複雑ではないようである。敬語は、相手との社会的、心理的距離を調節する言語的手段であり、[10] 日本語であらわされるものには、上下関係・親疎関係・場面の状態によるものなどがあり、常に対人関係におけるある種の評価を基軸としている。したがって敬語として考えられる言葉そのものだけでは、正しく敬語を使うことはできない。そこに敬語のむずかしさがあるのであり、敬遠されることになる。とくに日本文化になれ親しんでいない外国人にとっては大変厄介な問題であることは当然である。しかも人間関係の根本に敬語があるとなると、よほど日本に精通しない限り敬語による判断の狂いや誤解が生じることは明らかである。しかし大局的にみれば、敬語の誤用は決定的・致命的な問題をひきおこすことはまずないといってよいであろう。

言語による思想伝達には、言語が異なる場合にさまざまの理解の隔たりがおこりうるということは、上にみて来たことであるが、言語以外のもので、言語同様の役割りをもつものがある。いわゆる非言語的行動である。これは言語そのものというより言語にともなって行なわれるしぐさである。例えば相づちがその例としてあげられる。日本人の言語行動をみると、きき手が話し手の話した内容を理解したことを示す場合に、相づちをうつことによってそれを表現する。相づちをうつことによって、自分は話しをきいているという意志表示をなすとともに、自分も話しに参加していることを相手に伝える。ある場合には、相手の話しをうながすこともあるし、また時には相手の話をさえぎって自分の意見をいう

きっかけをつくることにもなる。相づちをうつことで、話し手の方にも、自分の話をきいてくれたという安心感があって、話しを進めてゆくことが出来るのであり、相づちは会話の進行上欠くことのできないものである。ところが英語の場合をみると、相手の話しの間に相づちをうつことはほとんどない。皆無とはいえないが、相づちをうつのはむしろ失礼になるという。事実、外国人が英語で話しているのをきいていると、相手の話しを黙ってきいている場合が多い。そして相手の話しをきき終えてから自分の意見を述べはじめる。その際間髪を入れずに相手の話しをひきとって自分の側にもってゆく見事さははたでみていて舌を巻くほどである。日本人のように「そうですねえ……」というような前置きを入れることは、まずないといってよいだろう。自分の考えは、相手の話をきいている間に確立されていて活発に意見がのべられる。これに対し、日本人は相手の話に自分のペースを合わせてゆく。このように異なる習慣を身につけた者同志の話しが、どちらかの言語でなされた場合、例えば英語でおこなわれた場合には、日本人はやたらに相づちをうつことによって相手の話の進行をかき乱すことになるし、一方、日本語で話しがなされると、日本人はただ黙ってきいているばかりの外国人に対して、一体自分の話を理解してくれたかどうかという不安と焦慮で相づちを促したりすることになる。これなど文化の相違をまざまざと見せつける例である。言語以外のしぐさが言語行動を助ける役目をしていることを把握しない限り、外国人は日本人の自然な日本語を十分に修得したことにはならないのであるし、反対に日本人は母国語のもつ特長を捨てて外国語に立向わなければならないのである。

文化的背景にあるもの

このように異なる言語による思想の伝達には、さまざまの要素が含まれて居り、それは言語だけの問題ではなくその背後にある文化との関わりで生きていることは言うをまたない。そのため、異なる文化をもつ者間の理解をするためには言語だけでなく文化についても考慮しなければならない。

文化の問題については、近年数多くの学者・評論家によって論評がなされている。一つ一つあげることもできないが、それぞれ、文化人類学、社会学、民族学、政治学、言語学等々の立場から日本文化論を展開し、日本文化の特長は何であり、それが外国文化とどういう点で異なるかと、その異なることの原因を追求している。一般に結論は、日本文化は他の文化、とくに西洋文化に比べると極めて特殊なものであり、それが長い歴史の中にさまざまな形態であらわれているということに論をしぼり、このような西洋文化にない要素をもっている日本人の思想や行動は、外国人には極めて理解しにくいとしている。これらの書に共通していえることは、概して日本文化に対して点が辛いということである。これは第二次世界大戦後いち早く「菊と刀」を刊行し、日本文化を恥

の文化としたルース・ベネディクトを追うものであるが、ベネディクトとちがう点は、ベネディクトが多少の誤解はあるにせよ外国文化である日本文化をとりあげて西洋文化と比較対照させたのに対し、日本人による日本文化論にはいずれも日本文化を主として西洋文化と比較した結果日本文化のマイナス面を強調し西洋に対する劣等感的意味合いをもたせていることである。しかし、これらの日本文化論によって、日本人の思考形式、論理構造が白日のもとにさらされたことはたしかであり、異文化と接触する際に役立つという点で大いに貢献している。日本人が、日本文化の特質をふまえた上で新らしい眼で自国の文化を見直し、日本人の思考様式の特性について考えをめぐらすことに役立っている。

文化の違いをもととした人間関係・生活様式・行動形態・心的構造などはさまざまであるが、西洋文化と日本文化の相違の一つとして、宗教のもつ役割りをみとめないわけにはいかない。キリスト教と日本の宗教の対照である。西洋におけるキリスト教は、西洋的思考、西洋文化を席巻し、そのすべての源泉になっているのに対し、日本の宗教は、古来からの民族の信仰にたつ神道と、これを吸収した仏教を基盤とする思想・文化が中核をなしている。そしてこれが長い年月の間に宗教という枠以上に、人間生活の全般にわたって深く滲透していった。西洋的思考と日本的思考、西洋的心情と日本的心情の間には、かくして異なる宗教から派生した異なる要素が入りこみ、これが、人間という基本的な存在をこえて拡がっている。

その一つの例は、よくいわれるように神の解釈に端的にあらわされている。万物の創始者であり万物を超越した唯一神と、人間よりすぐれた力の持主であり乍ら人間とつながりをもつ存在である日本の神々とは、根本的に違う性格のものであるが、この思想が、宗教の上だけでなく、文化全般にわたって奥深く潜んで居り、いろいろの形であらわれてきている。例を音楽にとると、西洋に発達した管弦楽は、一人の指揮者のもとに数十人の楽団員が奏する旋律が調和、統一されて「音楽」をつくり出す。指揮者の振る指揮棒は、すべてをあやつり、その意志の許に結集させる力を持っている。指揮者は唯一人聴衆に背を向けてたち、楽団員とも離れた台上に棒をふる。演奏が終れば一人孤独に去ってゆく。指揮者がいなければ西洋音楽は成立しない。指揮者は神の位置にいる。楽団員のひとりひとりは指揮者と直接につながりそれを通して他の楽団員とつながる。一人一人独立した存在である。これに対して日本音楽をみると管弦をはじめ幾人かによる合奏にも指揮者は存在しない。恐らく一座の長老と思われる人の音頭によって合奏がはじまる。ここには演奏者一人一人の横のつながりがあり、そのつながりの中に音楽が生まれる。全体の中の個なのである。これは神道の神々のあり方に似た思考の型である。

以上は音楽を例にとって筆者が思いついたことを記してみたのだが、この「神」の考え方は音楽だけでなく、言語構造にもその

他の行動形式にもあてはまるものがあると思われる。そして、ここに文化の違いの基本的な型の一つがある。

さて、以上のように主として言語を中心として考察してみると、異なる文化における理解について次のようなことがいえるのではないか。

まず言語についてみると、異なる文化の間で使われる言葉の、その言葉のあらわす範囲と、それと対応すると考えられる他の文化圏に属する言語の範囲には、重なり合っている部分と重ならない部分とがあるということである。この重なり合っている部分については、相互に理解はなり立つ。thank you＝有難うというケースはこれにあたる。これは重なり合っているということで、すでに異なる言語間の意味に合意があるからである。つまり、客観的・技術的にこの重なり合いの部分の説明が成り立つのである。しかし、この重なりをもつ二つの言語には、重なり合わない部分もある。しかもその重なり合わない部分が、重なり合っている部分よりはるかに大きい場合が多い。その部分については、理解し合うということはそれほど簡単なことではない。この重なり合わない部分が大きければ大きいほど理解はむずかしくなってくる。しかし、この重なり合わない部分について相互の認識があればいいのであるが、問題はその認識のありようである。お互いに理解し合っていると思っていることが、とんだ誤解である場合もあり、理解し合ったということのもつ重要なおとし穴に気付かぬ場合がある。文学作品の飜訳上の誤まりは原作の意味を変えてしまうことにもなりかねないが、しかしこれは致命傷ではない。しかし、国際間の問題になるとこの小さな理解のズレが思わぬ大きな結果を生むことになる。

異文化間の理解は、これを確認し合う場合、その人が異なる言語にそれぞれ精通し、思考形式、文化の様式、そして心情によく通じていることが第一条件となる。同じ人間なんだから理解し合えぬことはないというのは、一般論としては通用しても、現実の問題についてはいえることではない。そのような場合には理解し合えたかどうかということは確認することさえ難しくなる。大きな文化の一部だけ理解して全体がわかったと考える危険性もさる事ながら、それ以上に、文化のある部分を理解したと考えてまったく別の相反する理解をしていることは、更に危険である。

(1) 国文法の解説は大体この三点にしぼられている。岩波講座「日本語」等参照。
(2) 朝日新聞一九七六年一月九日および一九七六年五月二四日の記事。岩波講座「日本語」三中の石野博史 外来語の問題より引用。
(3) 同論文に外来語の問題について詳しい分析がある。
(4) 中村保男「飜訳の技術」中公新書 昭和四八年 二六頁以下。
(5) Chomsky, N.; Aspects of the Theory of Syntax MIT Press, 1955 安井訳「文法理論の諸相」研究社。
(6) 寺村秀夫「態の表現と『適切さ』の条件」日本語教育 三三号

一九七七年。

(7) この点について九月三日（昭和五二年）朝日新聞夕刊に倉谷直臣氏の論評がある。

(8) 毎日新聞　八月一七日「異文化の交錯の中で」

(9) 橋本峰雄「『うき世』の思想」講談社現代新書　昭和五〇年　一四六頁。

(10) 岩波講座「日本語」四　敬語　まえがきV、他。

（たかぎ・きよこ、宗教学、アメリカ・カナダ　十一大学連合日本研究センター副所長）